

「確かな学力」を身につけさせる学習指導の在り方

－学ぶ楽しさを実感できる授業への改善を通して－

国語科

上野保久

柏崎純一

高橋重年

1 はじめに

平成10年10月に新学習指導要領が示され、平成14年度から完全実施となる。領域の改訂と授業時数の削減は、年間指導計画及び、日々の授業の大幅な改善を余儀なくした。

そのような中で、我々国語教育に携わる者は、これまでの国語授業を反省し、新たな方向性を求めなければならない。これまでの国語授業は、一つの単元、または教材において、多くの目標を掲げ過ぎた。必然的に学習活動も多かった。例えば、文学的文章の読み取りにしても、人物描写を捉えたり、情景描写を捉えたり、主題を捉えたり、朗読したり、暗唱したり、演じてみたり、そして、感想を書いたり、主人公への手紙を書いたり、10時間以上もかけて取り組む。そのような授業を数多く見てきた。指導要領の文言は大まかなので、具体的にいくつかやっておけば、どれかがどこかの文言を言い当てるだろう式の授業になってはいまいか。本末転倒である。指導要領は、生徒にどのような言語能力をつけるべきかを示したものである。漠然としすぎる、わかりづらいと批判も多々ある。しかし、それは、文部科学省が示した指導要領に完成を期待するからである。指導要領は、方向性を語っているものであって、ゴールではない。ゴールは、授業者が、目の前にいる生徒を見て決めるのである。授業者の我々は、目の前の生徒の言語能力を向上させるために、その方向性として指導要領を善意にくみ取るべきであろう。たとえば、指導要領の「言語事項」漢字に関する部分を読んで、「学校で漢字の書き取りテストをしなくてよくなったのだ。」と捉えてはいけないのである。先生は楽になり、子供たちは喜ぶ。しかし、そうになったら、近い将来に生きる人々の言語生活が貧弱なものになってしまうことは、想像に難くない。我々は、学習者の将来の言語生活まで考えて国語の授業を、また国語教育に携わらねばならないのである。今日の前にいる生徒に授業するとはそういうことなのである。将来にわたって生きてはたらく言語能力を身に付けさせることは我々の使命なのだ。

そこで我々は、生徒に定着させたい言語能力を一層具体化しなければならない。つまり、何よりも重要なことは、生徒が「この授業でこのような言語能力が身に付いた」と確かに実感できる授業を実践することである。その実感は、「確かな学力」の定着につながることはもとより、次の国語授業への関心や意欲となって現れ、それは、将来において生きてはたらく言語能力となって十分に応用されるのである。

2 研究計画

(1) 第1年次（平成14年度）

- ア 研究仮説の提示（「確かな学力」の定着のために）
- イ 年間指導計画に位置付けた授業の試行と改善
- ウ 国語科がとらえる「楽しさ」の分析

(2) 第2年次（平成15年度）

- ア 研究仮説に基づく実践（楽しさを実感させる授業の試行と改善）
- イ 授業改善による生徒の変容の調査と分析
- ウ 国語科がとらえる「楽しさ」の分析結果の検証

(3) 第3年次（平成16年度）

- ア 研究のまとめ（年間指導計画の修正，評価規準の検討）
- イ 次期研究仮説の検討

3 前年度までの研究

本校では平成10年度より「生きる力を高める教育課程の編成と実践（各教科の特性を生かして）」という研究主題のもと、「生きる力」を高める教育の在り方について研究を進めてきた。本校で捉える「生きる力」とは、「自分で課題を見つけ，自ら学び，自ら考え，主体的に判断し，行動し，よりよく問題を解決する能力」「自らを律しつつ，他人と協調し，他人を思いやる心や感動する心などの豊かな人間性とたくましく生きるための健康と体力」である。これを受けて，本校国語科としては「生きる力」を次のように捉えた。

- (1) 自己の考えを明確に持ち，目的などに応じて論理的に表現する能力
- (2) 話を聞いたり，文章を読んだりして必要な知識や情報を獲得し，活用する能力

さらに，教育課程審議会の答申（平成10年7月）の中で，国語の改善の基本方針について，「言語の教育としての立場を重視し，国語に対する関心を高め国語を尊重する態度を育てるとともに，豊かな言語感覚を養い，互いの立場や考えを尊重して言葉で伝え合う能力を育成することに重点を置いて内容の改善を図る。特に，文学的な文章の詳細な読解に偏りがちであった指導の在り方を改め，(1)自分の考えをもち，論理的に意見を述べる能力，(2)目的や場面などに応じて適切に表現する能力，(3)目的に応じて的確に読み取る能力や読書に親しむ態度を育てることを重視する。」と示されている。

本校国語科では，これらの生きる力としての国語力を目指すという観点から，論理的な表現力の育成をさらに進めるために，各領域についての指導法・指導過程，及び各領域間の関連指導の在り方を工夫してきた。まず，論理的表現力育成のための「学習スキル」を効率的に指導するため，個々のスキルをより効果的に身に付けさせるための教材の開発及び指導過程の工夫に重点を置いて取り組み，次のような成果が得られた。

- (1) 個々の学習スキルを効果的に習得させるためには，「ガイダンス」「ドリル学習」「スキルの応用学習」「評価」という指導過程が有効であったこと。
- (2) 学習スキルを習得させるために，平易な教材（語句・内容・構成の面から）や意見の述べやすい教材（語句・内容の面から）等，教材の範囲を広げることで，生徒の興味・関心を喚起できたこと。
- (3) 3領域1事項の意図的な関連指導を進めることにより，学習スキルの効果的な育成を図ることができ，授業時数の量的なスリム化につながったこと。

また，国語の改善の基本方針に示された「伝え合う力」を本校なりに捉え，各領域相互の関連について研究を進めた。本校国語科では，特にこの「伝え合う力」を単にコミュニ

ケーション能力と捉えず、次の4つの側面を持ったものとして捉えた。(1)話し手としての学習者の自己を確立する力、(2)聞き手に伝える技能、(3)読み手に伝える技能、(4)他者の話を的確に聞く技能、の4つである。これらを切り口として、「話すこと・聞くこと」「書くこと」「読むこと」及び「言語事項」のそれぞれの特質を理解し、生徒の実態に応じて関連指導を図る必要がある。しかし、安易にすべてを関連させようとする、時数のスリム化に逆行することになる。そこで、特定の目標を実現させるために、指導事項相互の関連を、言語活動や教材の特質等との有機的な関連でとらえ、見通しをもって効果的な学習を組織する必要がある。3領域1事項の関連指導は、まとまりのあるじかも重点のはっきりしたものにしていくことに留意しなければならないのである。具体的な実践については、後述の実践例を御覧いただければ幸いである。

4 これからの研究

研究テーマに掲げた「確かな学力」を定着させる学習指導の在り方を考える上で、本校国語科では、次のような研究仮説を提示したい。

確かな学力を定着させるには、学ぼうとする態度の育成が不可欠であり、そのためには、生徒の意欲を喚起し、それを持続させ、次の学習に生かそうとする態度にまで育てるような授業の改善が必要である。

この仮説を基に、追究していくべき事項を次に掲げる。

(1) 授業改善について

- ア 国語科でとらえる「楽しさ」の分析
- イ 教材・教具の開発
- ウ 指導過程の工夫
- エ 授業者の生徒評価の観点の明確化
- オ 生徒が、理解できたり身に付いたりした言語運用能力が実感できる自己評価の観点の明確化

(2) 「年間指導計画」の修正について

- ア 年間指導計画に位置づけた授業の試行と改善
- イ 学習内容と評価規準の適合性の検討

5 実践例

- (1) 単元名 さまざまな情報を見分けよう ―新聞の記事を通して―
- (2) 単元の目標 書き手の論理の展開の仕方を的確に捉え、内容の理解や自分の表現に役立てる。
- (3) 具体目標

- 1 マスメディアの伝える情報は、事実を再構成したものであることを

理解することができる。

- 2 事実と意見を読み分けて、書き手の論理の展開の仕方を的確にとらえながら、新聞記事を読むことができる。
- 3 目的を持って新聞を読み、事実を伝える文章を書く際の参考にすることができる。
- 4 抽象的な概念などを表す語句の使い分けについて理解をすることができる。

(4) 単元設定の理由、指導方針

新学習指導要領では「伝え合う力」の育成が強調されている。「伝え合う力」について本校国語科としては、単にコミュニケーション能力とはとらず、①「話し手としての自己を確立する能力」、②「話し手として聞き手に伝える技能」、③「他者の話を的確に聞く技能」④「書き手として読み手に伝える能力」の4つの側面を持ったものとして捉えた。そのため、自ら学ぶ意欲と主体的に学ぶ力を身に付けさせるとともに、論理的な思考力、判断力、理解力、表現力等を積極的に育成する必要があると考える。

また、新学習指導要領ではこれまでの、文学的な文章読解中心の国語科からの脱却を目指し、言語教科としての国語科の立場を重視している。「C読むこと」の領域では特に、言語活動例として「(ア) 様々な文章を比較して読んだり、調べるために読んだりすること。」が示されている。本校の考える「伝え合う力」のうち、①「話し手としての自己を確立する能力」の育成を担うのが、この「C読むこと」領域と「聞くこと」の領域である。そのため、本年度は、新聞と映像教材を用い、吟味させることで、書き手の記述の仕方の特徴や材料の活用の仕方に注意させ、自分の表現に役立てることをねらいとした「読むこと」領域の単元を設定した。

本単元では、新聞等マスメディアは「ありのままの事実」を伝えるものではなく、編集等の作業をすることにより「構成された事実」を伝えるのだということを理解させるとともに、取り上げた事実やその取り上げ方、意見や感想の述べ方が効果的であるかどうかを考えさせたい。

(5) 指導計画（4時間扱い）

時	学 習 活 動	準 備
1	<ul style="list-style-type: none">・ 本時の目標を確認する。・ 映像教材を視聴し、その中で起こっている出来事を確認する。・ 映像に対する、2紙の新聞記事を比較し、選ばれている事実の違いを確認する。・ 報道により伝えられる情報の特質について話し合う。	V T R（自作） 学習プリント（別紙1） 新聞（資料1）
2	<ul style="list-style-type: none">・ 本時の目標を確認する。・ 例文1をもとに、事実を「報告」している見出しを選	学習プリント（別紙2）

	ぶ。 ・ 例文 2 をもとに、「報告」と「推論」の文章を比較する。 ・ 例文 3 をもとに「報告」と「断定」の文章を比較する。 ・ 例文 4 をもとに、ある「断定」をするための根拠を考 えることができる。	
1	・ 新聞の記事から「断定」の表現を探し、それを支える 事例を選び出す。 ・ 新聞の内容の是非について考える。	新聞（各自） 資料 2

【考察】

授業の導入において、新聞の情報に疑いを持ったことがあるかと生徒に尋ねてみた。生徒からの答えは「持ったことがない」というものがほとんどであった。そして、われわれ大人も新聞からの情報、テレビからの情報に疑いを持つことなく日常生活を送っているという現状がある。そのような状況の中で、新聞の情報に対し、批判的に読みとる能力を付けることは有効であり、また、自分の表現にも役立つと考える。一見、事実だけを並べてあると思われる新聞の記事の中にも、記者の意図が見え隠れする「断定」の表現が使われていたり、事実を意図的に選択して、自分の記事を組み立てていることに気づいた生徒は、安易な情報に騙されることなく賢い生活者となることができるであろう。

実際の授業にあたっては、次の点に留意した。

(1) 資料の入手がしやすい新聞を授業に取り上げる。

これは、「新聞」という、身近で情報源として優れており、しかし、疑うことをしてこなかった文章が、実は記者の意図によって書かれているということが、生徒にとって新鮮な驚きをもたらすと考えたからである。

(2) 導入で、マスメディアの報道する情報について、「構成されている」ことを新聞記事・映像教材を用いた例によって理解させた上で、自分の周りでその例を探し（情報収集）、分析するという過程をとる。

今回学んだことを使い、自分で実際に分析してみるという過程が、真の理解につながり、今後の文章の読み方にも、態度として表れてくると考えたからである。

(3) 新聞を比較する視点として、①記者の選んだ材料の活用の仕方、及び②記述の仕方の 2 点を挙げる。

これは、メディアリテラシーのキーコンセプトであり、また、記者の意図を考えるためには、この 2 点に注意することが最も有効であると考えたからである。

以上のような留意点を設けることにより、生徒は意欲的に活動することができたと考えられる。そのため、実際の新聞を使い、新聞の記事から「断定」の表現を探し、それを支える事例を選び出す学習や新聞の内容の是非について考える学習では、ほぼ全員が課題をクリアすることができた。

6 おわりに

平成14年度から3か年計画で「『確かな学力』を身につけさせる学習指導のあり方ー学ぶ楽しさを実感できる授業への改善を通してー」というテーマで本校共同研究が立ち上がる。これを受けて国語科では、これまでの研究の反省と成果をふまえ、さらに国語科の目指すべき学力とその定着への方策を追究していかなければならない。

折しも、カリキュラムの改訂により、日本の子供たちの学力低下が不安視されている。現場の教師としては、不満もあるが、その矛先を、文部科学省に向けている暇はない。文部科学省から示された学習指導要領を、我々が目の前の子供たちの実態に即してどのように解釈し、どのように具体化（授業）するかにかかっている。学力の低下だけは避けなければならない。当たり前の話だが、常に目の前には生徒がいるのである。その生徒が目を輝かせて授業に臨んでいる光景を、我々授業者は夢見るべきである。

国語の基礎・基本を効果的に身に付ける重要な方策の一つに、生徒が意欲的に学ぼうとする態度の育成があげられる。我々は、このことを今回の授業改善の視点とした。生徒が楽しいと感じる授業、また、その授業によって、自らに定着した国語の力を実感するような授業への改善である。そのような授業を実践することは、将来にわたって自らの言語生活を豊かにしようとする人間を育成することにつながると考える。

〈参考文献〉

- ・「中学校学習指導要領（平成10年12月）」（文部科学省）
- ・「中学校学習指導要領（平成10年12月）－解説－国語編」（文部科学省）
- ・「言語学習」－その方向と実践－ 長尾高明著（尚学図書）
- ・「メディア・リテラシー」－世界の現場から－ 菅谷明子著（岩波書店）
- ・「メディアリテラシー授業入門」 トロント市教育委員会編 吉田孝訳（学事出版）
- ・「新中学校国語科経営講座」 安藤修平・相澤秀夫編（明治図書）

記者の意図はどこにあるのだろう 1

☆ 次の写真に対する二つの新聞社の記事について考えよう。

A 新聞

(平成一二年五月十九日)

立ち話で十分？

森喜朗首相（左から二人目）に立ったまま、退陣を求める申入書を渡そうとする民主党の鳩山由起夫代表（右から二人目）と羽田孜幹事長。

「座って森首相の話を聞いてほしい」という野中広務幹事長（左）の要請を断り、鳩山氏らは三分ほどで部屋を出た。

＝十八日午後、国会



B 新聞

(平成一二年五月十九日)

にらみ合い

民主党の鳩山由起夫代表（右から二人目）と羽田孜幹事長（右端）は、退陣の申入書を手渡そうと迫ったが、森喜朗首相と野中広務幹事長（左端）は、この時、拒んだ。

＝十八日午後四時、国会で

① 二つの新聞記事のうち、どちらが正しい新聞記事だと思いますか。A・Bどちらか選びなさい。

A

B

③ 選ばなかった方の不備なところを指摘しなさい。

☆ 今日の授業をまとめよう

記者の意図はどこにあるのだろう 2

例文1

森喜朗首相（自民党総裁）と鳩山由紀夫民主党政代表が18日午後4時、国会内で会談した。鳩山由紀夫民主党政代表は、森内閣の退陣を求める文書を持参した。会談には両党幹事長が同席。鳩山氏と羽田孜民主党政幹事長は立ったままで申入書をテーブルに置いた。森首相の目の前に書類が置いてある状態で、野中広務幹事長は、「座って森首相の話を聞いてほしい。」と言ったが、鳩山氏と羽田氏は、席には座らず、3分ほどで退席した。会談終了後、自民党役員は「立ったまま申し入れだけして帰るのは失礼だ」とのコメントを記者団に発表し、野中幹事長も今後の党首討論に応じない考えを民主党側に伝えたと述べた。

課題 次の文は、この出来事を報じた夕刊4紙の見出しです。この中で、起こったことをそのまま伝えてある見出しはどれでしょう。

- ア 立ち話で十分？
イ にらみ合い
ウ 3分で会談終了
エ 森首相不機嫌

報告

例文2

課題 次の二つの文を比較しなさい。

- （ Aさんは、話し合いの最中、私と一度も目を合わせなかった。
Aさんは、私のことを嫌っている。

推論

例文3 次の二つの文を比較しなさい。

- （ A君はテストで85点を取った。
A君は優秀な生徒だ。

（ 彼はただ一人、その提案に対して最後まで反対し続けた。

断定

例文4 次の文で表されている事柄が、「正しい」と言えるための根拠となる事実を想像して答えなさい。（具体的な報告の文にすること）

A君は勇敢な生徒だ。

次の要領で新聞記事を分析してみよう。

1999.11.17

児童虐待・救済に乗り出すも8人死亡 厚生省調査で判明

児童相談所は本気で子供を守ろうとしているのか。厚生省が17日に公表した「児童虐待相談の処理状況報告」は、児童相談所が虐待を知りながら、判断ミスや対応の遅れで命を救えなかったケースが各地で続発していることを改めて浮き彫りにした。予算の削減と職員のおよび腰による「児童相談所の空洞化」。個々の事例からは、そう思わざるをえない実態がのぞく。

群馬県で昨年8月、3歳の女児が母親の内縁の夫に殴られ、死亡した事件でも母方の親族から虐待の通報があった。児童福祉司が女児の家庭を訪問したが不在だったため、警察など関係機関に連絡を取ったものの面会はいったん見送った。事件はその夜に起きた。昨年4月の大阪府のケースは、3カ月の双子の兄弟の弟を虐待した母親への対応が弱腰だった。児童相談所は親の同意がなくても子供を一時保護できるが、弟を乳児院へ入れるよう母親を説得した。しかし断られたため、保育園に入れる方向で指導中。今度は兄が暴行を受けて亡くなった。

1 「断定」している部分を□で囲む。

2 「断定」している部分が正しいと言えるための根拠となる材料の部分に~~~~線を引く。
3 「断定」されている事柄が正しいと言えるかどうか判断する。

資料 1



スポーツニッポン紙

2001年6月8日

コンフェデレーションカップオーストラリア戦で、シュートを決めた直後の中田選手と小野選手



日刊スポーツ紙

2001年6月8日

コンフェデレーションカップオーストラリア戦で、シュートを決めた直後の中田選手

2つの新聞は、同じ瞬間をカメラにおさめたのにも関わらず、日刊スポーツ紙は中田選手を強調するために小野選手の画像を意図的に削除した。

三月の善乎地震で、住宅地を支える擁壁の大規模な崩壊が広島県呉市で十四か所も発生、そのすべてが一九六二年の宅地造成等規制法施行前に造られた石垣とみられることが土木学会の調査でわかった。自然石を積み上げた石垣の強度を強化して、土中學會は「他都市を念へ、古い石垣は薬剤やセメントを注入して強化しておかな」と危険だと警告している。

学会の現地調査によれば、

と、崩壊した石垣の大半は、戦前の造成。積みだした石の間に砕石を詰め、一、二空石積」と呼ばれる工法で、建物の重みや地震の揺れに弱いため、高さが五メートル十メートルある石垣が多く、家の底が一部抜けて、曲に傾くなど、十四か所で住宅計二十一戸が損壊した。

いずれも法施行後なら許されない「既存不適格」の構造。石垣の上部にフロックを積んだり、もう一段石垣を築いたりして宅地を広げた結果、強度がさらに低下していた所や、石垣の内側の斜面の花ごう岩が地下水などで風化し、土になっていた所もあった。

一部は復旧済みだが、純な石の積み直しや、土間にキルタルを埋める応急処置で済ませた所も多く、現行基準なら欠かさない水抜きパイプを省いて復旧した所もあるという。

呉市は急傾斜地崩壊危険区域が約五百か所、がけ地危険区域が約九百か所もある。



高さ20坪に及ぶ石積み擁壁が地震で崩れ、半ば宙に浮いた民家。土木学会提供

古い石壇
危ない

土木学会調査団メンバーの橋本隆雄・千代田コンサルタント都市計画部設計課長は「法施行前の石垣は、どの地方でも空石積が多いと思われるので、自治体は危険箇所を調べ、積極的に改修勧告を行うべきだ。改修を費用面で助ける制度も必要だ」と語っている。

[illegible]

「タマスに」になりて知られる市川準監督の作品。すい
と立った志位氏が、ウエスタ
のバルトを語るきり校。四
つ切らぬばたに「身
可縮ぬ」曲くあつたこ
はひだ。

CG処理もしたが、20回も本
気で締め上げた志位氏はミミズ
ばれが残ったなか。仕上がり
見て「ちょっと恥ずかしがって
いた」(市田忠義書記局長)や
うだ。

共産CMやっぱりまじめ



「岳地帯でゴミ拾いに汗を流す子供たち」

環境美化に願ひ込め

正目に余る家電ごみ

那須岳などで清掃活動

【那須】自然公園内の生石園地や那須岳など広範圏にわたって行われた。

ン」が三十日、湯本の殺
五月三十日を「ごみぜ

新野下

口の目」にかけて、泉自然公園美化推進協議会那須支部が一九六三年から毎年、実施。参加した地元的那須小の児童と観光関係者など十五団体、約二百五十人は、ごみ袋を片手に観光客や登山客の残したごみ拾いに汗を流した。

クマザサの生い茂る聲
山道沿いなどから耳念に
拾い集められたごみは
袋詰め、ベックポールに
どが多々、大きなごみ袋
で約四十袋。また家電リ
サイクル法施行の影響も
あって、ハードディスク
一台分のテレビやビデオ